No. 1
1993
2.11

WARRIOR★

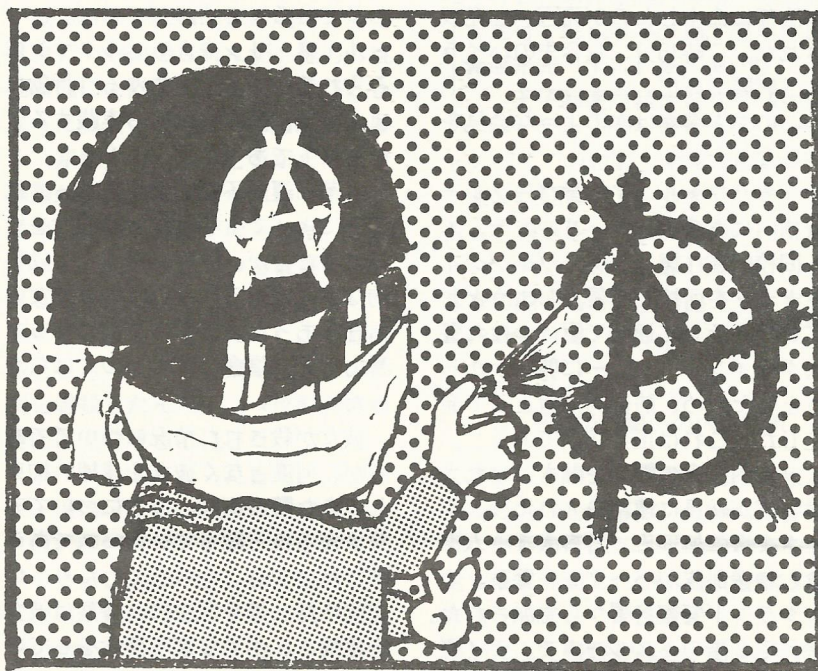
A.R.P 通信
〒606 京都市左京郵便局
私書箱57号 ARP
本号 200円
定期購読料2500円（10号分）

無政府！Do！やらんか！Anarchy！

うっとうしい世の中、つまらない学校、こき使われるだけの会社、不満だらけの毎日だ。と言って何もしないでいるのは面白くないはずだ。ただうっとうしい世の中に文句だけたれてひとり愚痴っているだけじゃあ、何も変わらない。

学校がつまらないのは、教師だけが悪いんじゃないし、ケチな上司がいるから働くことが苦痛となるけれども、原因はそれだけじゃないはずだ。そいつらをがんじがらめにして操っているのは、今の社会そのものなんだから。不満たれて何もしないんじゃ、そいつらと同じになっちまう。どうなるわけでもないさと、あきらめてしまうには、ちょっと早い。

一人でも、とにかく突っかかって行こうじゃないか。自分の怒りを、思いっきり解放して、ぶつかる、文句をはっきりとつける、そして暴れてやろうじゃないか。それが、アナーキーってもんなんだ。目の前にあるすべてのものに異議あり。すべては、社会が作りだした障害物なんだ。

アナーキーやってると、それがよく見えてくる。あくせく働いても、それに見合うだけの給料がもらえるわけでもないが、社長はぜいたくな暮しをしているし、つまらない勉強なんてしたくはないけれど、親は良い学校へ行って一流企業へ勤めてくれとおしきせばかり言う。それは、社会がそれを美徳として人間に押しつけているからだ。おとなしく学校へ行って、従順に会社で働き続けることを望んでいるのは、この社会であり、押しつけてくる社会の仕組み

が確かに存在している。

いやな毎日を押しつけてくる社会の仕組み、これをぶっ壊してしまおうとするのがアナキズムだ。

教師をぶっとばしても、社長をフクロにしても、親と縁を切っても、それだけじゃ社会は変わって行かないし、俺たちの自由ってやつは、まだ遠い。苦痛や不満を生み出す根っこを断ち切らなくちゃ。この社会を、この国をぶっつぶそうぜ。暴れてやろうぜ。国会や天皇なんて、跡形もなく吹き飛ばそう。それが、アナーキーってもんだ。アナキズムだ。

どうだ、君もアナーキー。無政府やらんか！

発刊にあたって

この新聞は、闘うアナキストの新聞として発行される。能書きだけで何もしないアナキズムとは、一線を画して行く。そもそも理屈だけこねまわしているのは、アナキズムとは最も縁が遠いものであるはずだ。

とりあげる記事の内容は、まず第一に、現在闘っている我々自身の課題の提示とその闘いの報告。第二に、世界中での闘いの紹介を柱として行く。

現在我々が取り組んでいる、天皇制への闘い、自衛隊の海外派兵に反対する闘い、あるいは身近にひきつけた諸問題、そういったものを積極的に提示していきたい。

世界中に闘っている仲間たちがおり、その闘いは戦闘性や視点の新しさから我々の闘いの参考となる。それらを紹介することを軸としながら、具体的な国際連帯をも目指して、交流や連帯行動を作りだしていく決意である。

当面は不定期刊行となる予定。ぜひ定期講読をしていただくようお願いします。（T・K）

★定期講読申し込みの方に、もれなく『ゲバタリアンカレンダー』プレゼント！（5月まで）

同志虐殺に報復の市街戦

1992年８月25日午後７時頃、アメリカ、オークランド（カリフォルニア州）で、アナキスト活動家ローズバット・アビガイル・デノヴァ（20才）が権力の手により虐殺された。警官クライグ・シューの放った銃弾が胸部に命中したのが死因、と発表された。７時45分、収容先のハイランド病院で死亡。

このあと警察は次のような会見をおこなった。

「カリフォルニア大学バークレー校構内にあるチャン・リン・ティエン同校総長住居に、デノヴァがナイフとナタを所持して侵入しようとしていた。そして通報で駆けつけた警官クライング・シューに襲いかかろうとしたため、防衛的措置として発砲した。これは正当防衛である」。

「構内侵入の警報を聞きつけた大学警察が総長に連絡を入れた後、すぐさま爆弾処理班、警察犬チームを含む増援部隊がバークレー警察、オークランド警察各署から急派された。総長宅２階のバスルームで、デノヴァが所持していたナタで襲いかかってきたため、警官は銃弾三発を発射し彼女を射殺した。彼女はガスバーナーでサッシを焼き切って総長宅に侵入しており、バッグの中にはピープルズ・パークに関する大学当局への要求書があった」とも、発表されている。

警官以外の目撃者はおらず、この日の朝いったい何が起こったのか、我々には知るよしもない。ただ、我々の同志が死んだ、それも警察により殺されたということだけは、ハッキリとしているのだ。

闘いに身を捧げた戦士デノヴォ

デノヴァはベイエリア地区出身で、２年ほど前にラディカルな闘争がやりたくて、この街に出てきたのだった。彼女は精力的な活動家であり、とりわけ湾岸「大虐殺」戦争に反対する闘い、そして彼女が居住していた場所でもあったピープルズ・パークの闘い（カリフォルニア大学当局が、約 110アールの大学所有地に、反対派やそこで生活しているホームレスの人々の抗議を無視してバレーボールコートを作ろうとしていることに反対し、20年以上にわたって闘われている）で活躍していた。

ルイス・リンやＡ・ベルクマンにみられるような、いわゆる「行動による宣伝」を彼女は自ら実践するアナキストであった。

「革命運動不在の情況にあっては、抑圧によって生じた社会的犠牲を組織することが、闘いのもっとも効果的な方法である」というのが彼女の信念であった。そして彼女にとって、暴力はその信念に背くものではなかった。

彼女が殺された情況についてであるが、何度となく彼女を逮捕、拘束してきた警察側は、彼女について充分すぎるほど知っていたハズである。昨年だけでも、十数回にわたり「爆発物所持」等を理由に、警察は彼女を逮捕し、不当な家宅捜索をしている。

91年８月には、彼女のつきあっていた男性、アンドリューと共に「爆発物所持」容疑などを理由に逮捕、起訴されており、この公判が数週間中に開始される予定であった。

この事件は、バークレイヒルズで爆弾の爆破実験現場が警察によって発見されさ際、周辺から見つかったメモに彼女の指紋がついていたというものであった。そのメモには、大学関係者を含む数名の「ターゲット」がリストアップされていた。この他に、現場周辺からはクロスボウ、やじり、「アナキスト・クックブック」とよばれる爆弾教本、さらにはカリフォルニア大学周辺の地図と同校総長への「呪いの言葉」を綴ったとみられる日記も発見された。（警察発表）

彼女、デノヴァはまさに闘いに身を捧げた「戦士」であるといえる。どこであれ、警察とのもめごとがある時には常に彼女の姿があった。その 170㎝体重45キロの小さな身体にもかかわらず、非道の限りをつくす警官に対し、真っ向から立ち向かっていったのである。

そして、活動において『あきらめ』ということを知らなかったのも彼女である。様々な集会に積極的に参加し、ビラ貼りや地元のアナキスト紙「ＷＥＢ」での活動など、とにかく活動という活動にはほとんど参加していたといっていい。

しかしながら、マスコミにとって「デノヴァ射殺事件」は、たんに恰好のネタを提供するだけでしかなかった。そして彼女は「精神的に疾患があり、凶暴な性格であった」とか、警察によって彼女の部屋から押収された日記に記されていた「暴力革命」などのセンセーショナルな言葉のみを拾い上げ、ハデな見出しを付けたうえ、さらには「５才の頃から精神科に通院」などと書き立てたのである。

警察が押収した日記には、政府転覆、連邦議事堂爆破、ＭＸミサイル基地占拠核ジャック計画、アメリカ大統領やローマ法王暗殺、そしてティエン総長の住居襲撃などについて書かれていたと、発表されている。

彼女は、巨悪や不正に対しては、怒りを臆面もなくあらわにするタイプであった。活動家でありながらも、現実の生活の前に妥協してしまった

りしている者も多いだろうが、彼女にはそれができなかったのだ。これが彼女の「不幸」であったのかもしれない。

彼女の遺品のノートには次のような記述があった。

「みんなへ：私達が必要なのは、バスルーム、運動場、舗装路、道路、噴水なのよ。カリフォルニア大学、市建設局なんていますぐ追い出せばいいんだ。ピープルズ・パークに奴らを一歩たりとも入れてはいけない。ここを守るためなら、私は命なんか惜しくない。あなたは？」

虐殺抗議の報復戦闘を展開

デノヴァ虐殺に対する仲間の怒りは当然「警察への糾弾、報復戦闘」となって爆発した。

虐殺の翌日、街頭では警官隊との激突戦がいたるところで繰り広げられ、通りには火炎バリケードが築かれ、警察権力を徹底糾弾したのだった。またテレグラフ・アベニュー沿いにある企業事務所には、次々と攻撃が加えられていった。この時、彼女のボーイフレンドだったアンドリュー・バーナムを含む多くの参加者が逮捕されている。彼は現在「警官に対する重武装攻撃」なる罪状をデッチ上げられ、起訴されている。今もって保釈は認められておらず、なおも拘留中である。

同じ日に行われた虐殺糾弾の集会では、怒りの声が次々とあがった。

「われわれにとってハッキリしていることは、彼女が虐殺されたということだ」

「警察の発表では撃たざるをえない状況だったとしているが、ではなぜ足をねらわなかったんだ」

「彼女が本当に侵入したというのを誰が証明できるんだ。なぜ捕まえようとせずに殺したんだ。最初からそのつもりだったんじゃないのか」

翌々日の夜には、虐殺現場までの緊急デモが組織されたが、権力の挑発の他に、内部的にも荒れることとなった。というのはこの日、いわゆる「非暴力戦術」をとるかどうかで議論が交わされていたためである。

そしてある男性が発言した。

「我々の闘いはいつも警察が手を出してきたら、それには断固として反撃するというものだった。今回のことを考えてみろ。奴らは我々の仲間を虐殺したんだぞ。『反撃』する理由は充分すぎるほどだ」

事件から５日たった日曜、「デノヴァ追悼デモ」が広範に呼びかけられた。追悼スピーチがひととおり終了すると、誰が呼びかけたわけでもないのに参加者はキャンパスへと向かい始めた。そしてそのうちの多くが、キャンパス構内の施設、校舎を次々と破壊しはじめたのである。

バークレー市街では散発的に「暴動」が発生していたが、この大学キャンパスでの戦闘も果敢に闘われた。一連の戦闘は地元テレグラフ紙でも大きく報道された。「暴動デモ」鎮圧のため急派された警官隊は、デモ隊を包囲することすら出来ず、完全に粉砕された。

デノヴァ！
永遠なる闘いの内に眠れ

デノヴァの家族（彼女はこの家族というものを呪っていたのだが…）は、射殺事件に関して独自調査を開始すると発表したが、彼女を知る我々にとって、この調査のもたらす結果がたとえ警察を非難するものであったとしても、何の意味もないということを言わなければならない。デノヴァは「警察の改革」など望みはしないのだから。

彼女には「非暴力」というコトバは似合わない。
ましで彼女は「ウィ・シャル・オーバーカム」を合唱しながらデモをするような人間ではない。
「革命」そして「闘い」、これこそが彼女の全てであり、もっともふさわしいコトバである。
ローズバッド・デノヴォ、君は「永遠に安らかに」ではなく、「永遠なる闘い」のうちに眠るのだ。

――――　追悼　★

（『Love & RAGE 』、『Bayou La Rose 』などより、まとめ）

殺人ネオナチを許すな！

外国人やアウトノーメ活動家への襲撃を繰り返すネオナチは、昨年11月21日、アウトノーメ活動家シルビオ・マイヤー君を虐殺した。ネオナチを弾劾するとともに、同志の死を追悼する。（詳細次号）

事件の前後の状況をまとめてみた。

●11月21日（土）

【エルパスト】レストランにいた数名のネオナチを、バットなどで武装したアウトノーメ、アナキストグループが襲撃。

【ハンブルグ】ハンブルグ大学構内で、小型ガソリンタンクを使用した（時限式発火装置型）爆弾が爆発、炎上。「左翼グループの犯行」とマスコミ報道。

【ベルリン】地下鉄構内でアウトノーメ、ネオナチが乱闘となり、アウトノーメ活動家、シルビオ・マイヤー（27才）が刺殺される。また女性を含む2名が重傷。記憶喪失1名。

●11月22日（日）

【シュトラールズンド】ネオナチが亡命希望者を襲撃。

【ラセノウ】ネオナチ約20名が、アウトノーメのスクウォット占拠ハウスに武装襲撃。

【シェーニンゲン】難民センターがネオナチファシストにより放火される。

【ベルリン】前日虐殺されたシルビオ・マイヤー君を追悼し、反ファシストデモ。数千人が参加。

【メルン】トルコ人約45人の入居している共同住宅が火炎ビンで放火され、3人が焼死、9名が負傷。「家を燃やす。ハイルヒトラー！」との予告電話が、地元警察と消防署にかけられた。襲撃予定の番地まで予告されていたにもかかわらず、当局は対応しなかった。翌日には、地元メルンで高校生が反ファシズムデモを組織。

ベルリン、ハンブルグで数千人が参加しての反ファシズムデモ。

両日の戦闘で計14名の逮捕者。

ナイジェリア政府は不当弾圧やめよ
同志釈放を要求する国際連帯週間

ＷＳＡからのアピール

抑圧的な軍部独裁という印象を払拭しようとするイブラヒム・ババンギダ将軍のナイジェリア政府は、93年に選挙を施行することとなった。しかし、選挙に出る二つの政党はどちらも独裁政権が創立したもので、この選挙自体非常に疑わしいものである。

ナイジェリアのリバータリア社会主義団体Awareness League(A.L)によると、軍部独裁から文民政府への移行は、専横な監禁、政治活動の禁止、国立大学の閉鎖、組合活動の禁止を含む、労働者への抑圧をともなっている。さらに増大する外部負債、急上昇するインフレ、ＩＭＦ／世界銀行による緊縮経済計画などがナイジェリアの状況をより困難にしている。

国家権力による抑圧の被害者の中に、A.Lのメンバー4人、ウバンデ・チュクス、ガルバ・アドゥ、キングスレイ・エティオニ、及び書記長ジェームズ・ヌドブィスィがいる。彼らは1992年以降の労働者、学生によるデモの波の後逮捕された。彼等はそれ以後、過酷な状態の下に監禁されたままでいる。

2月22〜26日の一週間、アメリカのWorkers Solidarity Alliance とNeither East Nor West-NYC は、連帯行動を呼びかけている。

※　　※

この呼びかけに応えて、我々は、以下の『抗議声明』を発表しました。

この声明は、2月22〜26日の国際連帯週間の期間中に、ナイジェリア大使館ならびに、キャンペーンを呼びかけているアメリカのＷＳＡに送付します。この声明に賛同される方は、2月22日までにＡＲＰにお知らせ下さい。署名に追加します。

ナイジェリア政府に対する抗議声明

我々は、貴国に以下の要求をする。

1. 昨年逮捕された『Awareness League』の4人のメンバー、ウデンバ・チュクス、ガルバ・アドゥ、キングスレイ・エティオニ、ジェームズ・ヌドブィスィの即時釈放。
2. 不当に囚われている、全ての政治犯の即時釈放。
3. 政治活動や労働組合活動等の社会運動への弾圧の即時停止。

我々は、この声明を2月22〜26日に行われるナイジェリアで囚われている4人のための国際連帯週間の一環として発する。貴国は、自らの弾圧的政治が国際的な非難にさらされていることを、思いしらなければならない。

1993年2月11日

ＡＲＰ
労働者連帯運動
（国際労働者協会日本セクション）
関西地方委員会
黒色救援会（京都）
黒木　建（アナキスト連盟）

以上

ビッグ・マウンテンの闘い

ブラック・メサの母なる大地を奪う日本企業への攻撃を準備しよう！

「白人たちは、郵便小包でも送りだすかのようにインディアンを簡単に別の場所に移してしまえると思っているようだが、そんなことはできはしない。

インディアンを、この土地から引き剝がすことなど、できはしないのだ」。ーアスキイ・ベッツィ

侵略と居留地への追い込み

ビッグ・マウンテンの闘いとは、近代史においても、最も長く、かつ複雑な歴史をたどった闘いのうちの一つと言える。現在の情況を理解するためにはまず、今日の闘いへと至る過程を見ていかねばならない。

白人がやって来るずっと以前から、ディネ（ナバホ）とホピが隣どうし並んで暮し、互いに交流していたのがこの地、ビッグ・マウンテンである。

1583年、スペイン人「探検家」アントニオ・デ・エスペホは、このディネとホピにまたがって存在するこの地を「部族間紛争地域」と報告した。

1680年ディネとホピは、スペイン人を追い出すために蜂起した。これがいわゆる「プエブロ・レボルト」であった。

1683年、ホピ側の土地を除いてこの一帯は再びスペインの占領下におかれる。

1848年、アメリカーメキシコ戦争でのグアダルペ・ヒダルゴ条約では「先住民の移住は行なわない」としていたにもかかわらず、1849年以降白人入植者らは、この地に怒濤のごとく押し寄せて来たのだ。すなわちアメリカによるディネに対する戦争攻撃は、ここから始まったと言える。

キット・カーソン大佐はディネの家畜や作物を荒らしまわり、捕らえたディネの人々を 400マイル（約 650キロ）も引き回したうえ、ニューメキシコ・フォートサマーに連行した。この移送中に、あるいは集中キャンプで何千人もの人々が死んでいった。

４年間の飢餓状況下での集中キャンプ生活を余儀なくされたのち、1868年、ディネはナバホ条約を強制的に受け入れさせられてしまう。これは、さらなる飢餓状況をディネに強いるものでしかなかった。

1871年、インディアンに関するすべての事柄は、内務省の直轄担当となる。ディネとホピの子供たちの誘拐、すなわち「教育」を名目として、学校という監獄に収容して「文明化」させるプログラムが開始された。学校では「インディアンの伝統は邪悪なもの」と教えられ、自らの言語の使用も禁じられた。

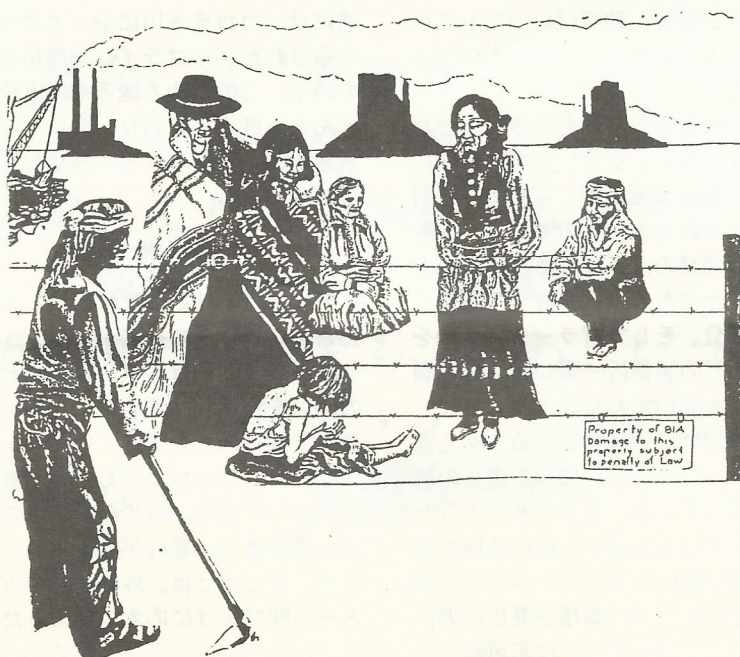
1882年、大統領アーサーによって、「共同使用地域」が明記された執行法が発布される。ワシントン白人政府は、これをもとに地図に３つのラインをひいた。まずホピの居留地を「共同使用地域」周辺の真ん中に、そしてさらにその周辺をナバホ居留区としたのだ。

当時、インディアンの移送されたすべての土地は、まったく何の価値もない土地だったのだ。ディネとホピのどちらとも、この地域における管理権を与えられてはいなかったので、政府の「共同使用地域」設定に関するこの法案に容易にサインした。どこにも行き場のないインディアンたちを、ゴミ捨て場に集めておいておくかのような政策であることは明らかであった。

資源の発見と土地の収奪

1909年、ブラック・メサの地において石炭鉱床が発見されて、企業はこの地に狙いをつけたが、容易に借りれないと判断し、1923年にスタンダード・オイル社の要望という形で内務省が第１回目の「ナバホの集会」を設定した。

1934年、最初から政府に都合のよい決定を下すための機関、先住諸民族らの部族委員会開設を定めた「インディアン改革決議」が議会で採択される。ディネとホピは防衛のため、この部族委員会を何度も解散に追い込む闘いをおこなった。

ブラック・メサの石炭のほとんどは、「共同使用地域」内に埋蔵されていた。政府が憂慮していたのは、ナバホとホピのどちらもが借地協定へのサインを拒否するかもしれない

ということだった。

1946年、モルモン教徒の弁護士、ジョン・ボイデンが、この地域の所有借地権協定設立工作を目的としてナバホ部族委員会に送り込まれる。政府側のプランを一切受け入れるつもりのなかったディネは、ジョン・ボイデンの申し出をきっぱりと断った。

のちに内務省は、ボイデンを再び送り込み、存在もしない土地問題の議論に決着をつけようとした。彼はホピの部族委員会なる組織をデッチ上げ、鉱物採掘権問題を「解決」するために、自らその委員となる。

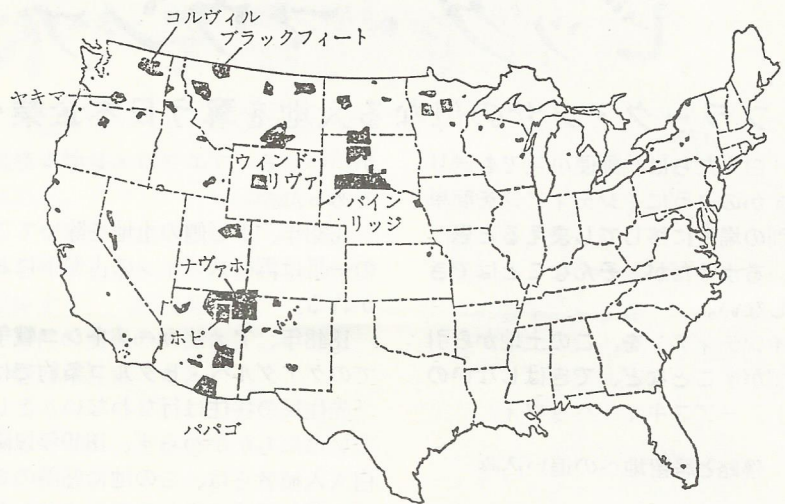
1958年ボイデンは、のちに議会で可決される公民法85-547条項の草案を提出する。これは、この一連の土地所有権問題に関して、ボイデンの起こした裁判で彼に有利にはたらくものとなった。

1962年、ボイデン訴訟は「勝利」し、連邦最高裁もこれを支持した。この判決の結果、1000平方マイルの地域が、「ホピ部族委員会」に渡ることとなったのである。

1966年、「ナバホ、ホピ両部族委員会」は、アメリカ合州国による石炭略奪」であるピーボディ炭田採掘権譲渡契約にサインした。ピーボディ炭田の全権はボイデンのものとなり、さらにこの地域一帯を分割するための法案制定がもくろまれていたが、容易にはいかなかったため、モルモン教団教宣団体の「エヴァンズ&アソシエーツ」によって「レジャー・ウォー」なる計画が企てられた。この計画は、ワシントンポスト紙によって暴露され発覚した。しかし、この計画はすでに進行していたのである。

強制移住の開始と資源開発

1974年には、議会で公民法93-531条項が可決される。これは、この地域を2つの部族委員会に半分ずつ分割するというものであった。すべてのインディアンを「フェンスの向こう側」の、より環境の劣悪な地帯に強制的に移住させることが実行された。

100人のホピと10,000人のディネが、政府によって居住不可とされていた場所に移されることとなったのだ。この法律には強制移住のほか、家畜90%の削減強要なども盛り込まれていた。すなわち、ディネの土地からあらゆるものを根絶やしにし、奪い尽くさんとするものであったのだ。

インディアン保留地の分布（1980年）

1977年、連邦地裁は分離境界線を布告する。そして1980年に、1986年7月6日までとする強制移住期限を定めた公民法96-305条項が議会で可決される。この移住期限の設定については、のち、この日に至ってもなお政府側がここに手をつけなかった事実をもって、ディネ側が勝利したのだ、と多くの人々の誤解を生んだ。だが、この期限の意味していたのは、「この日以降、政府はいつでもこの場所に入り込める」というものだったのだ。

二つの重要な事柄をおさえておかねばならない。まず、これら政府による一連の議論はディネとホピに対してなされてきたものではなく、鉱物資源開発のためになされてきたということである。「共同使用地域」の大部分、そしてブラック・メサを含むホピの居留区一帯には、鉱物層が広がっていたのだ。

この地域に居留している人々も含め、すべての先住民に立ち退きの危機が迫っている。また、多くの人々が知っているとおり、他の法律や司法制度の壁が立ちはだかっているゆえ、公民法93-531条項を廃止に追い込むことは、現実的には不可能であるということである。

ピーボディ炭田開発計画は、この地区を荒らしつつ、石炭を根こそぎ採掘するということなのだ。そしてこれは、鉄道でカリフォルニアのロングビーチまで運ばれ、船で日本に輸出される。日本は、南アフリカからの石炭輸入を停止するかわりに、アメリカから石炭を買い付けようとしているのだ。

ピーボディでは、ブラック・メサでの二つの鉱床の採掘がすでに開始されていて、ここでは年間約1200万トンもの石炭が生産され、アリゾナ州ペイジのナバホ発電所や、237キロも離れたモハヴェ発電所などに運ばれている。モハヴェ発電所への輸送には、コロラド川に沿ってはりめぐらされたパイプラインが使用されている。このため、地下水の水位はどんどん低下しており、井戸などの湧き水が干上がるなどの深刻な事態となっている。

ねばり強い抵抗運動

ディネは、強制移住に抵抗した。1977年、ディネの長老ポーリン・ホワイトシンガーは、フェンスぎわでの闘いを呼びかける。数マイルにも及んで張りめぐらされていたフェンスを、実力でひきはがしていく闘いが始まったのだ。多くのディネの仲間が逮捕され、暴行が加えられた。

ディネとホピは、外部からの支援とその呼びかけに応えて集まった協力者たちとともに運動を展開してい

った。これら抵抗を続ける者に対して、政府は執拗ないやがらせを繰り返している。

空軍ジェット機の故意の低空飛行や家畜削減強要、新規建築物建設禁止通達、井戸の汚染、軍の投入計画（当時の大統領レーガンは、連邦代執行官と軍隊の力をもってすれば、30分で「移住」が完了するなどと公言している）などである。そして裁判所による家屋解体命令（連邦地裁82年４月判決）やデマ宣伝、脅迫攻撃など、あらゆる卑劣な手段で立ち退きを迫るなどしている。この他、支援者が宿泊用に使用していたキャンプ施設の解体命令も裁判所が下すなど、分断攻撃もなされた。

これら権力の厳しい弾圧下にありつつも、「自分たちの大地を守りぬく」という決意のもとにディネは闘っている。決して多いといえる人数ではないが、支援グループも最後まで闘いきると宣言している。

ディネの長老、ルス・ベナリーは、こう述べている。「我々に選択の余地がなくなろうとも、その時は素手でも闘うであろう。私がいかに小さな存在であろうと、最後の最後まで闘い抜く。少なくとも私が生きている間は、やつらを一歩たりとも、この地に入れるわけにはいかない」。

ディネの闘いはあなたの支援を必要としています。支援グループを作って、ビッグ・マウンテン支援ネットワークに参加してください。教会、組合、人権擁護グループなど、あらゆる場所でアピールして下さい。

より詳しく知りたい方は、シアトル・ビッグ・マウンテン支援グループ発行のパンフ“Big Mountain Information Packet”があります。（領価／１部５ドル）

▷The Big Mountain
Support Network
P.O.Box 5464, Tacoma,
WA 98415-0464, U.S.A.

また、ビッグ・マウンテン現地でも現闘支援グループが活動中であり、活動拠点確保や資金調達などに奔走中です。直接訪れてカンパや差し入れをしてくれてもいいですし、もしくは我々に送っていただいてもＯＫです。

〈ブルガリア〉 青年アナキストグループからのメッセージ

仲間のみなさん

私達ブルガリア・アナキスト青年ソフィア連盟（Ｆ．Ａ．Ｍ）は、1990年７月に結成され、現在各地域あわせて 200人以上のメンバーがいます。

私達のこれまでの活動を紹介します。

《1990》

【７月11日～18日】政治勢力によるデッチ上げ不正選挙に抗議して、ソフィア市街各所を実力バリケード封鎖。

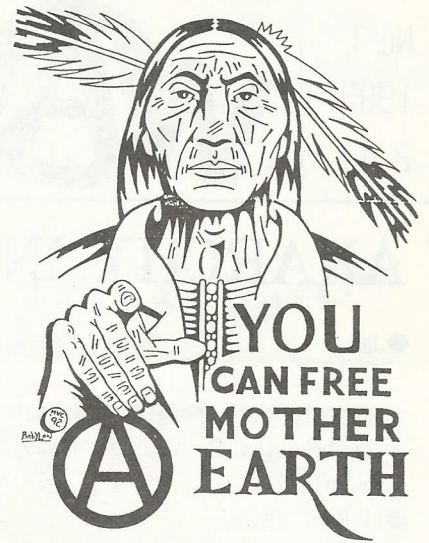
【７月３日～８月５日】共産主義者である大統領ムラデノフに反対する「真実の都市キャンペーン」に参加。

【11月７日】ボリシェビキ恐怖支配の開始されたこの日を思い起こし、レーニン像前でデモ。この他、11月は共産主義政府に反対する連続デモをおこなっている。

《1991》

【１月】ソビエトによるバルト諸国での弾圧事件に抗議し、ソ連大使館前でデモ。

【５月１日／メーデー】 300人が結集しての集会。

【７月２日】ブルガリアで最初のアナキストであり、また1876年のトルコ支配を打ち破るためのブルガリア独立闘争でたおれた国民的英雄クリスト・ボテフの記念碑（ソフィア）前での追悼行進。

【７月26日】91年２月に逮捕されたモスクワのアナキスト２青年、ロディオノフとクズネツォフへの連帯行動。ブルガリア保安省（ＤＳ）前で署名活動とピケ闘争を展開。

【10月19日】ソフィアのイギリス大使館前で、人頭税反対闘争での被弾圧者の釈放を求めてデモ。釈放要求署名も提出。

《1992》

【５月19日】国防省前で、反軍・反戦ロックコンサート。義務兵役期間の短縮や良心的兵役拒否者への社会奉仕兵役免除制導入などを要求した。

私達Ｆ．Ａ．Ｍは、全世界のアナキストもしくはアナキスト系のグループ、組織との関係構築を希望しています。機関紙、雑誌、パンフ、バッジ、カセットなどアナキズム関係の資料をぜひ送って下さい。

F.A.Mでは現在、ブルガリアの社会／運動情況などを紹介するニュースレター“Action”を発行しています。

Ｆ．Ａ．Ｍに連絡をとりたい方、もしくはカンパを送りたい方があれば、ＡＲＰまで御一報下さい。住所等をお知らせします。

No. 1
1993
2.11

WARRIOR★

Newsletter
from Revolutionary Anarchists

A.R.P
P.O.BOX 57
Sakyo, Kyoto
606, JAPAN

ANARCHY IN JAPAN 1992

●Jan.
Anarchist Federation raised funds to the struggle against construction of Czorsztyn Dam in Poland.

●11 Feb/ Kyoto
Meeting and rally against Tenno = Japanese Emperor. Gov't regards and celebrates this day as "National Founding Day" grounding the ancient myth that Japan has founded by the ancestor of Tenno.

●Feb/ Tokyo
General congress of Rodosha Rentai Undo (RRU/IWA Japanese section).

●29 Apr/ Kyoto
Meeting impeaching Japanese invasion to asian countries.

●14 Jun/ Kyoto
Meeting and rally against dispatch of SDF (Self Defense Force) overseas under the name of U.N/PKO=Peace Keeping Operations. Militant anarchists crushed with police force on the street.

●6 Aug/ Hiroshima
General assembly of anarchists.

●15, 27 Sep/ Kyoto
Series of demonstrations and human-chain sorrounded SDF base blocking SDF units deployment to Cambodia.

●2 Oct/ Osaka
Riot in the workers town of Kamagasaki. Workers' anger exploded against the local city council and police. Cars were burned. Fire bombs were thrown. Anarchist was arrested.

●30 Oct/ Tokyo
Protest action against Peruvian embassy appealing the release for Andres Villaverde has made by the group GICRAV (formed by ARP).
Before dawn, embassy has been attacked with a fire bomb.

●21, 22 Nov/ Kyoto
General congress of Anarchist Federation.

●16 Dec/ Kyoto
A lecture meeting at Ryukoku University, organised by a group of anarchist students.

<1993>

●24 Jan/ Tokyo
A lecture meeting inviting Misato Toda who has joined "International Symposium on Kropotkin" held in Russia (Dec '92).

★ ANARCHY GOES ON!!!

するどい質問であった…